

数学と松澤宥と私の諸々

宗田光一（美術家）

数セミを購読しているのは美術家としては松澤先生くらいじゃないのかな。そういう話をしながら、私に「量子芸術宣言」という作品本を初めて見せてくれたのは、諏訪市に住む宮坂了作という美術家でした。数セミというのは数学一般の内容で広い読者向けに編集されている月刊誌「数学セミナー」のこと。私が家族と共に東京を離れて下諏訪という街に住むようになり、3年ほどが過ぎた平成4年のことだったと記憶しています。私も数セミを読んでいた人間でしたので、宮坂さんが教えてくれた「量子芸術宣言」の白いずっしりした作品としての書物は私にとって衝撃でした。このことがあって同じ街に住む松澤先生のご自宅を訪ね、私自身も美術家としての道を歩みだすきっかけになりました。先生の量子芸術に関しての理解はまだまだであると思いますが、これは松澤芸術の中でも最高峰と感じています。そこで自らの浅学を省みず、先生に了解を得て、やさしいコトバで語りかけ中学生にも読んでもらうための解説本を書かせてもらうことにしました。あえて詩形式にして、韻を踏むような語り口調にし「量子芸術を読み解く」という内容の散文にしてみましたところ、松澤先生は「ぼくの仕事の数学的な面からの新しい解釈だ」とお話をくださいました。そもそも量子とは何かという理解から始まり、美術世界の融合を論じた読み解き本としての価値を認めていただけたことは、ほんとうに嬉しい思い出です。

松澤先生は教員として諏訪地域の定時制高校などで長年にわたり教えられてきました。担当は主に数学。そんなことから数セミは先生にとってごく身近な情報誌でした。1998年のことです。山形の芸術展にマセマティカルアート（数学美術）の「素数番の椅子」という作品で私も参加し、2000メートルの直線道路に基点から素数メートル間隔で人の座れる椅子を303個並べる作品を展示しました。そのことを先生に説明しましたところ、先生は「おそらく日本人の作品で2番目に大きい作品だ」と驚いておりました。ちなみに1番大きいのはエジプトのピラミッドの対角線に4000メートルの板を置いた作品とのことです。ずらり椅子の並んだその作品の全景を納めた写真を見て、目を細めて喜んでくださったことが昨日のこのように感じられます。そのとき先生に、これからも数学美術というのをやってみたいのです、と相談しました。すると先生は、数日後に郵便で私にたくさんのコピー資料を送ってくださいました。数字に関

係した美術をすでに発表している海外の作家などの情報をお知らせくださったのです。中でもイタリアのとある作家のフィボナッチ数列を使った作品コンセプトを真似ることのないようにと優しく教えてくださいました。知識不足から他の作家の盗作にならないように、そっとその情報をお教えくださる先生のお気遣いには本当に頭が下がる思いです。そんな慈愛に満ちた人でした。

私がマセマティカルアートという考え方で、新しい美術の開拓を試みようとしたのは 1995 年のことです。松澤先生にアドバイスをいただき、その次の年に初めての展覧会も実現しました。以前から数学を身近に感じ親しみ、それなりに勉学は積んでいましたが、数学者の考える「数学の美」を題材に美術表現の作品づくりに挑むというのは生半可な世界ではない、ということを知られる毎日でした。しばらくは数学そのものを勉強し続けます、と先生にも宣言しましたが、とんでもなく奥の深い数学。日々新しい発見が続き、専門分化が拡大し続ける学問としての数学。一人の数学者が一つの専門分野を極めるだけでも数百年はかかるとまでいわれているくらいですので、生涯の時間をかけたとしても目を見張るような業績を残すというのは途方もなく困難な世界なのです。さらに十いくつも数学には専門分野があるわけですから、時間をかけたからといって制覇できるというたぐいのものではありません。これには正直参ってしまいました。そんなとき松澤先生はこう励ましてくださいました。誰もが理解できることをやっているは新しい仕事はできない。進化したほんのわずかの人間にしか理解できないことを、少なくとも 20 年はやり続けてください、と。

そこで私の選んだ方法は、ほんとうにささやかでいいから学んでいく課程で出会った数学の美意識というものを素朴にビジュアル化してみよう、というものでした。「素数番の椅子」もそうした考えによる作品化です。このような取り組みをしながら、私と同じように数学美術をやってみたいという人がたくさん現れることで、より大きな美術の作品群となり仕事として完成に近づくものと楽観的に考えるようにしています。さらには興味をもったいくつかの未解決の問題について解をさぐり、手探りで進むことのできた部分を展示できる形態にし、ビジュアル化してみるという方法も考えました。そうすることで予想に反して、数学そのものについてもわずかですが多少の結果を得ることができ、関連分野の数学者と垣根なしに親交が持てるようになりました。数学をテーマに選んで美術を模索してきたおかげです。ここまで来られたのも、いつも心の支えとして身近に松澤先生の励ましがあったおかげと感じていました。

その松澤先生が 1994 年の山口県立美術館での個展に登場させた、数学をテー

マとしたファイル作品で強く印象に残っているものがあります。おそらくその専門分野を研究している数学者にしか分らないはずのチャークラスに関する引用論文を使い、美術としてイメージすることを求める作品でした。この作品との出会いが私の数学美術を喚起する出来事となり、すでに松澤宥の芸術として生まれ出た世界でもあったことを考えますと、私の取り組んでいる数学美術は、本質的には松澤芸術を一つ方向に進化させる形で継承したにすぎないモノなのかもしれません。九つの柱に加えていただくことで、先生ご自身が芸術としての可能性を育てたいと思い祈念して下さったのだろうと痛感しています。

2006年の2月2日、先生のお誕生日をお祝いさせてもらうために、家内と共に下諏訪のマンションに寄らせていただきました。久しぶりにお元気そうな先生と奥様の美寿津さん、初めてでしたが娘の久美子さんにもお会いしました。記念の写真を久美子さんがその場でたくさん取ってくださり、何枚も先生はその写真の裏にサインをしてくださいました。今はその写真が先生との最後の思い出です。お誕生日のお祝いになればと思い、ブランデーとアレンジフラワーを受け取っていただきましたところ、飲兵衛だからお酒は至福だと嬉しそうで、花カゴをいつまでも大事に抱えておられました。お会いできてほんとうに良かった。でもなぜかそのお姿が不思議とそのとき、私にとって先生とお会いする最後の時になるのではと感じられました。冬の下諏訪は寒く、夕方の玄関先でいつまでも手を振って見送って下さった松澤先生のお姿は生涯忘れることがないでしょう。

初めてお会いしたときの先生は70歳になられたばかり。そのころは確かにまだまだしっかりされていて若かったようです。下諏訪町で私が「あずさ」という画廊を開いたときに、お孫さんの名前と同じだと喜んでくださり、時々本屋さんに行く途中だといいいながら自転車遊びに来て下さった先生。その後私が自力で建築したアトリエに住むために山梨へ引っ越すことが決まり、建築途中の家に何度かお寄りいただいた遠い日のことも懐かしい思い出です。そのとき先生はジャン・コクトーもこんな丸いような白い家を自分で作った。同じような感性を感じますね、すごいじゃないですか。そう励ましてくださいました。その当時、若手の美術批評家だった石川翠さんとその友人が来ているから一緒に飲まないかとお誘いくださり、急いで下諏訪に行き、近くのレストランでワインパーティーになった日の思い出。山口県立美術館学芸員の斎藤郁夫さんとプサイの部屋で記念撮影したこと。初めての数学美術の展覧会に先生が駆けつけて下さったことなどなど。奥様はそんな先生をいつも傍らで支える気品に満ちた人です。とても頭のいい方で話題も豊か。なによりも犬の大好きな心優

しい人です。夫婦というのはこうあり続けたいものだ。先生のお宅にお邪魔するたびに、お二人のようすを拝見していつもそう思っていました。そんな思い出が昨日の事のように次々と駆け巡ってきて、先生との永遠のお別れは、私にとって一つの時代が終わったような感じがしたものです。松澤先生はとても優しく思いやりに満ちた大らかな人でした。数学そして物理をこよなく愛し、時には詩人となりある時には思想家となり、探究心旺盛に美術の新しい境地を開拓した偉大な人でした。

「80年問題」によって新しい人類の消滅イメージを作品とし、次いでご自身の経歴を消滅させることに取り組み、やがて自らの肉体を消滅させるという最後の仕事を通して松澤宥という作品を完結させることになったものと思います。

(2006. 11.30 記)